特集論文（『社会分析』33号, 2006, 61～80頁）

台湾の大学生が抱く高齢者像に関する考察 *

賴 明俊・莊 秀美

1. はじめに

台湾は、1993年に高齢化率は7.1%に上がり、高齢化率7%以上という国連の規定する高齢化社会へ突入した。その後、高齢者人口割合は低出生率の影響を受けて持続的に上昇が続き、21世紀に入ってそのテンポが一層速くなり、2004年末には高齢者数は2,150,475人で、高齢化率は9.48%に達している（内政部, 2005年）。このような高齢化社会を迎え、高齢者自身は自分の生き方について考えておく必要があることは言うまでもない。しかし、高齢者は自分自身だけで世の中で生きているのではなく、他の世代の人々との関わりの中で生活しているのである。この点を考えて、高齢者と関わりを持つ人々、特に次代の高齢者を支えていくために大きな役割を担う若年層についてさえも研究を進める必要があると思われる。とりわけ、多くの研究結果が指摘したように、若者層が持つ高齢者像は、彼らが高齢者に対する実際の対応に影響し、それが高齢者の現実的な生きがいと、生活の質を左右する可能性がある。社会的かかわりと高齢者の孤独感との関係を指摘する研究（Lowenthal and Haven, 1968）によると、親族より親友との交際が高齢者に心理的な幸福感をもたらすことや、配偶者を失っても親友がいる高齢者は、配偶者がいても親友がいない高齢者より生きがい感が高いことなどがわかっている。孤独感を減らし、幸福感を増やすには親友との対人関係が重要な要因になっている（渋谷, 1998）。また、高齢者像は対人サービス現場において、サービスの質と内容に大きく影響を与えている（劉惠津, 2001）。そこからみれば、若年層がどのよ

---

* 本論文は2004年12月25日に、台湾国立政治大学にて開催された第108回日本社会分析学会研究例会にて報告した論文の一部を再構成し、加筆したものである。

うな高齢者像を持っているかは彼らがどれだけ高齢化社会を担うかという問題とつながっていると思われる。そこで、将来の社会的エリートになる大学生が抱く高齢者像は大いに注目される課題であろう。

高齢者像というのは、いわゆる高齢者に対する全体的イメージであり、高齢者や老いについての観念や態度をその主観的見方としているもの、高齢期における人格や生活に対するイメージや意識、感情、欲望をも含み指すものである。高齢者像はその社会の歴史的背景及び文化的価値と深く関係し、また両者が影響しあうものであると考える。台湾は儒教文化の社会であり、昔から敬老思想及び親孝行を基盤とした家族構成を継承し、どの場面でも敬老や親孝行の教育が重視されてきているといえる。しかしながら、戦後、1950 年代以降、広がりつつあるグローバライゼーションの影響を受けながら、家族規模、家族意識などを含む家族全体には、近代化の荒波の及ぼす影響が顕著にみられることも否定できない。特に、台湾の家族意識の現状、中でも敬老思想の存続状態が留意される課題であろう。そして、今日ではどの程度扶養意識といったものが存在しているのであろうか。本論文は、台湾における研究調査の結果[1]を用いて、台湾の大学生が高齢者に対するイメージをどの程度もっているかという意識構造を分析するものである。

本文中では、今日の台湾の大学生が高齢者たちに対してどのような高齢者像を保っているかを捉えることにし、高齢者に対してどのような意識を持っているのか、すなわち高齢者に対する好意度はどうなっているのか、敬老思想の認知はどうなっているのか、老いの排除に関する認知はどうなっているのか、親への扶養意識はどの程度残っているのか、これらについて検討していくことが主たる課題になっている。以下は、先行研究と研究調査の結果を交えながら、大学生の高齢者像を分析するとともに、大学生自身のいきがいが、これらの形成において、どのような影響をもたらすのかも含めて検討していきたい。

2. 調査概要

まず、研究調査の概要を説明しておきたい。台湾の調査は、2004 年 2 月 26

---

[1] 山口大学大学院東アジア研究科 5 年プロジェクト研究「都市高齢化とコミュニティの再編に関する比較研究」（研究代表者小谷典子）の研究成果の 1 部である。

日から27日にかけて、有意選択法で選んだ台湾の台北市にある東呉大学の学生を対象に調査票調査が実施された。調査対象地域である台北市は台湾ではもっとも都市化の進んでいる都市地域であり、東呉大学の学生は台湾の各地から集まっている4年制の綜合的大学である。調査は日本語の調査票を中国語に翻訳して、閉鎖式調査票（close-ended questionnaire）で収集することとしたが、調査項目の中には中国語で表現が難しいものもあり、その部分は適切な中国語に修正して中国語版の調査票を作成した。調査実施は、東呉大学で選択したクラスに一斉に調査票を配布し、記入してもらって、直ちに回収する方式で行なわれた。回収された調査票の有効回答数は不完全なものを除いて391名であった。したがって、以下の分析に用いる有効な対象数は391のサンプルである。

調査対象者である学生の基本的属性は**表1**に示したとおりである。

表1：調査対象者の属性　　（　）内は実数

性別	男性	33.8% (131)	**住宅形態**	自宅	43.7% (171)
	女性	66.2% (257)		学生寮	32.0% (125)
所属学部	文学院	82.8% (323)		アパート・下宿	23.5% (92)
	理学部	12.8% (50)	**出身地**	台北市	25.6% (100)
	外国語学院	4.4% (17)		台北県	21.0% (82)
年齢	18歳	11.8% (46)		上記以外	49.4% (193)
	19歳	35.0% (137)	**家族構成**	核家族	74.9% (293)
	20歳	19.9% (78)		直系家族	21.2% (83)
	21歳	14.8% (58)		複合家族	3.6% (14)
	22歳	12.5% (49)			

性別構成にみると、男性は33.8% (131)を占めているが、女性が66.2% (257) [2]を占め、ほぼ全体の3分の2といっていいであろう。所属学部については、文学部がもっとも多く、82.8% (323)を占めている。次いで理学部が12.8% (50)、外国語学部が4.4% (17)、をそれぞれ占めている。年齢は、19歳が35% (137)ともっとも多く、次いで20歳19.9% (78)、21歳14.8% (58)、22歳12.5% (49)、18歳11.8% (46)の順になっている。

[2] （　）内は実数。以下同。

住宅形態に関しては、自宅がもっとも多く、171ケースあり、全体の43.7%を占めている。次いでは寮に住んでいて、125ケースあり、32%を占めている。アパート・下宿は92ケースあり、23.5%を占めている。

出身地は、台北市と台北県以外の他の地域がもっとも多く、ほぼ半分ほどの49.4% (193)を占めている。次いで台北市内の25.6 (100)、台北県の21% (82)、の順になっている。台北市と台北県からなる大台北都市圏は台湾ではもっとも都市化の進んでいる地域であり、人口が一極集中で600万人を超え、台湾の総人口の４分の１を占めている。調査対象者の出身地は、台北市と台北県以外の他の地域、及び台北市と台北県からなる大台北都市圏が半々ほど占めているのは、東呉大学の特徴をバランス良くあらわしているといえる。

そして、家族構成は、調査時点にて実家が核家族(親と子どもからなる二世代家族)というものがもっとも多く、74.9% (293)を占めている。次いで、直系家族（祖父母・両親・子どもからなる三世代家族など）が21.2% (83)、複合家族（核家族及び直系家族の以外の家族形態）が3.6% (14)、それぞれを占めている。核家族（74.9%）が高比率を示したのは、台北市及び台北県の出身者が半分ほど占めていることもあるが、台湾全体は核家族化が急速に進行していると多くの研究調査が指摘しているところでもある（張明政・李美慧, 2001; 黄意萍・余清祥, 2002; 薛承泰, 2003) [3]。

3. 大学生の高齢者像

3.1 老後に関する意識

さっそく学生が高齢者に対してどのようなイメージをもっているのかをみていきたい。人々がライフサイクルの中で何をもって老後を始まると意識する時点、すなわち人が個人的にも社会的にも老人として位置づけられ、また一線を

[3] 台湾の家族構成は産業発展して以来縮小する傾向を示している。2002年に三世帯家族は18.7%にすぎず、復帰直後より遥かに減少した。それに対して、夫婦のみの世帯は10.57%、夫婦と未婚の子のみの世帯は46.43%、そして片親と未婚の子のみの世帯は6.34%、これらを合わせた核家族世帯は全体で63.34%を示している。そして、世帯規模の推移からみれば、平均世帯員は1980年に入って４人以下と下がり続け、1985年に3.57人、2000年に3.33人、2004年には3.16人になっている(内政部戸政司公開資料)。

画されるようになる年齢は「老人線」と呼ばれている（辻, 2000: 65）。そこから老後の開始を捉えるために、設問として「あなたは、『老人』とは何歳ぐらいからだと思う」を使った。その回答は、「65 歳以上から」39.9% (156)、「60 歳以上から」34.5% (135)、「70 歳以上から」13.6% (53)、「55 歳以上から」9.7% (38)をそれぞれ占めている。大学生の考える老人線の年齢は、一般の行政が高齢者対策処遇年齢の下限としている「65 歳以上」や「60 歳以上」とみる人が一番多いことがわかる。

次に、老後をどのように認知しているかみてみたい。老後であるという認識は、社会的にないし個人的には職業からの離脱（退職）、主座の明け渡し（隠居）、身体の衰え（不自由）、配偶者の死、子供の独立、年金生活といった要因が関っていると思われる。そこから老後意識を捉えるために、設問として、「あなたにとって、『老後』とは、どういう時を境にして始まるとお考えですか」を使って、その回答としては、「仕事をやめたり、仕事を他の人に任せるようになったとき」（退職）、「年をとって、家事を他の人に任せるようになったとき」（家事の依存）、「年をとって身体の自由がきかないと感ずるようになったとき」（身体の不自由）、「妻または夫と死別したとき」（配偶者の死）、「子どもが結婚して独立したとき」（子どもの独立）、「年金が収入をささえるとき」（年金生活）などの項目を用意した（辻, 2000: 66）。調査結果は、「退職」が 43.5% (170)、「身体の不自由」が 35.3% (138)、「子どもの独立」が 30.7% (120)、「年金生活」が 23.3% (91)、「家事の依存」が 16.4% (64)を、それぞれ占めている。そこからみれば、「退職」と「体の不自由」を老後の開始期をみている大学生が 8 割ほど占めている。

これは、辻（2000: 63-68）が宮崎県内 8 地域の大人と高齢者の双方を対象とする「高齢化地域特性に関する調査」において、老後の開始期を「退職」で捉えるのは 20～24 歳の年代が一番高い比率を示したこと、及び、洪淑媚（1997）が国立台湾師範大学の 4 つの学部（理学部、教育学部、芸術学部及び文学部）の学生を対象とするグループ聞き取り調査において、大学生が老年の開始期を「生理側面」（容貌、行動力と健康状況）及び「仕事能力の喪失」から捉える傾向があることを示したことと、一致している。これらの一貫した結果は、大学生の年齢層が、職業についての意味づけを強く持っていることによると思われる。

3.2 高齢者の役割への期待

老後の仕事観に関する意識ついては、「あなたは、年をとってからの仕事についてどうお考えですか」という設問を使った。そして、「一定の年齢でこれまでの仕事に区切りをつけ、後は適当な仕事を選んで楽しく働くのがよい」という「余生就労型」の人が 68.3% (267)、「一定の年齢までは働くが、あとは引退して余生を楽しみたい」という「余生安楽型」の人が 21.2% (83)、「働けるうちは、いつまでも仕事を続けるのがよい」という「継続就労志向型」の人が 8.7% (34)を、それぞれ占めている。大学生は老後にふさわしい仕事に就きたいという意見が強いことがわかる。

しかし、自分たちの老後の仕事に対する継続意志は強くても、社会における高齢者の役割に対する意見は別のものである。「社会におけるお年寄りの役割として、ふさわしいものはなんだと思いますか」という設問が用意された。そして、その回答（２つまで選択）は、「昔の遊びや民話などを子ども達に伝達すること」58.8% (230)、「家族の精神的な支え」37.6% (147)、「ボランティア活動に積極的に参加し、社会奉仕活動をする」31.7% (124)、「地域の世話役として地域活動や行事に参加する」22.8% (89)、をそれぞれ占めている。それをみれば、文化伝達としての役割は高齢者に期待がもっとも寄せられ、また大学生は高齢者が家族にとってまた重要な存在だと考えているといえる。

3.3 高齢社会への関心

高齢社会への関心状況については、全体では「ある程度関心がある」59.3% (232)、「非常に関心がある」16.1% (63)、「あまり関心がない」19.9% (78)、「全く関心がない」2.3% (9)、をそれぞれ占めている。つまり、75%の大学生が高齢社会へ関心をもっていることがわかる。

さらに、性別に分けてみると、**図１**に示したように、女子学生の方が高齢社会への関心が高いことがわかる。

ところで、高齢社会において、ボランティア活動にたいする期待も強くなってくるが、75%の大学生が高齢社会へ関心を示しているとしても、それが生活の実際的行動に転化されるのか。**表２**に示したように、「老人への介護やボランティアが求められていますが、あなたは今後この種のボランティアに参加する意志がありますか」という設問に対して、「ある」55.4% (214)、「ない」44.6% (172)

となっている。それをみれば、大学生が高齢化社会に関心をもっても実際行動とは完全に関連しているのではないといえよう。また、性別に分けてみると、男性の方がボランティアに対して低い意欲を示している。さらに、所属学部に分けてみると、理学部及び外国語学部の学生の意欲が低い。

注目に値するのは、「あまり関心がない」と「全く関心がない」とを合計すれば2割以上を占めているということである。

図1：「性別」と「高齢化社会への関心」

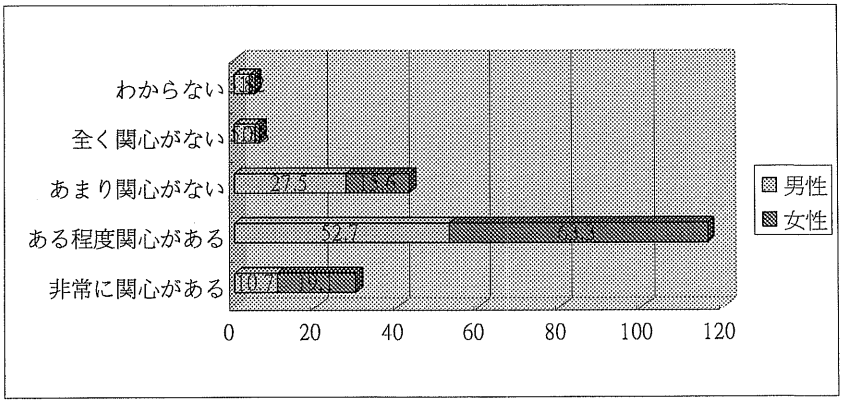


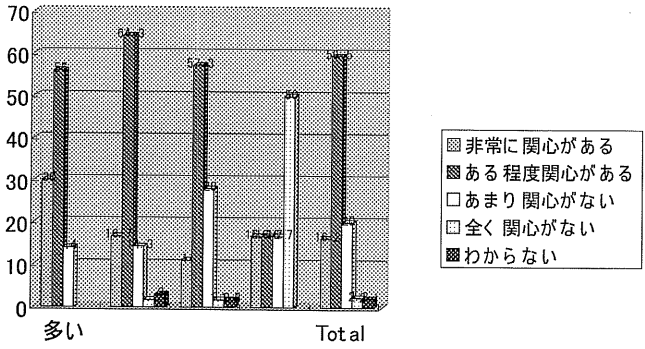
表2：「性別」及び「所属学部」別にみた「ボランティア参加意志」 ( )内は実数

ボランティア参加意志 / 性別・学部	ある	ない
男性	43.0(55)	57.0(73)
女性	62.0(158)	38.0(97)
文学部	87.8(187)	77.3(133)
理学部	7.0(15)	19.2(33)
外国語学院	5.2(11)	3.5(6)
Total	55.4(214)	44.6(172)

高齢社会への関心程度は、どのような要因と関係しているのであろうか。「高齢者とのつき合いの状況」と「高齢社会への関心」とクロスさせてみると、**図2**に示したようになる。

「高齢者とのつき合い」が「多い」ほど、高齢化社会への関心が高くて、非常に関心があるとするものが30%を占めている。それをみれば、「高齢者とのつき合い」の多い大学生が高齢社会への関心度が高く、逆に少ない大学生は関心度が低いことがわかった。これは、師範大学生を対象とする老人への態度や行動意識に関する研究結果と一致している（洪淑媚, 1997; 陳宜汝, 2001）。

図２：「高齢者とのつきあい」と「高齢化社会への関心」



高齢者とのつきあい

要するに、大学生の高齢者像は全体的にポジティブな傾向を示している。それは、高齢者との交流状況、すなわち、祖父母との生活経験に大きく影響されている。林如萍・蘇美鳳（2004）が行った中学生を対象とする高齢者像に関する調査も同じ結果を指摘している。

4. 老人差別意識分析

4.1 高齢者に対する好意度

以下では、大学生の高齢者の好意度や高齢社会像、及び老人イメージを分析することによって若者の老人差別意識をみることを課題とする。

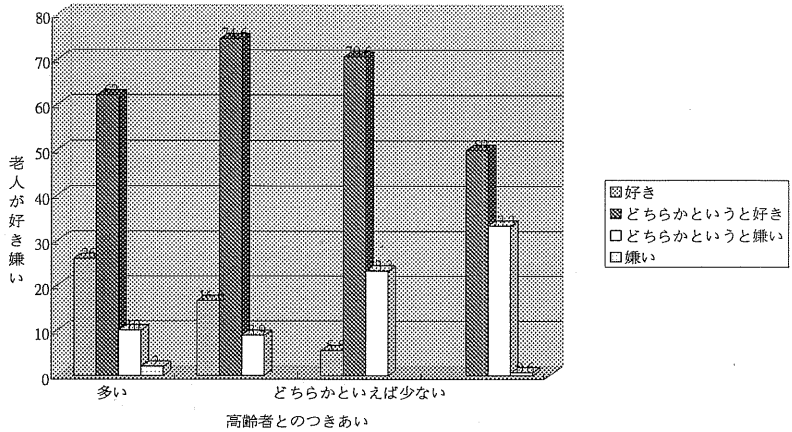
まず、大学生は高齢者に対してどのように好意を感じているのであろうか。「あなたは老人が好きですか」という設問でその度合をみることにする。「どちらかというと好き」が 70.5% (275)、「どちらかというと嫌い」が 15.6% (61)、「好き」が 13.1% (51)をそれぞれ占めている。全体的には 8 割強の大学生が高齢者に対し

て好意をもっていることがわかる。

ところで、核家族が主な家族形態である現代社会では、若者の中で多くは核家族で育ってきて、祖父母との同居経験は少なくなり、よその高齢者とのつき合いも少なくなっているはずである。こうしたことは老人への差別感に関係しているのではないか。つまり、高齢者に対する好意度は、高齢者との交流状況などの要因も大きな影響を与えていると思われる。このことを直接みたものが「高齢者とのつき合いの状況」に関する設問である。高齢者とのつき合いが多いかどうかについて、「どちらかといえば多い」43.2% (169)、「どちらかといえば少ない」41.9% (164)、「多い」12.8% (50)、の順になっている。全体的には 56%の大学生が高齢者とよくつきあっていることがわかる。

「高齢者とのつき合いの状況」が高齢者に対する好感度にどう影響をしているのかみてみよう。「高齢者とのつき合いの状況」と「老人が好きですか」とクロスさせてみると、**図 3** に示したように、高齢者とのつきあいが「多い」と答えた大学生の場合、26%が「好き」と答えており、「ない」と答えた大学生では「好き」という回答が一人もいない。

図 3 :「高齢者とのつきあい」と「老人が好き嫌い」



そして、「どちらかというと好き」を加えてみると、「好き」という回答は 88%になり、「少ない」と答えた学生の回答の 50%よりも遥かに多くなっている。そ

こからみれば、高齢者とのつきあいの多い大学生ほど老人好きのものが多くなっている。また、そうでない大学生より、高齢者に対する積極的な好意度ではっきりした差がみられる。

4.2 敬老精神の認知

次に、敬老精神の存在をみてみよう。敬老精神というのは、高齢者は敬われるべきである、高齢者にたいしてはみな敬意を払い大切にしなければならないといった意識を指す。これに関する設問として、「あなたは、いまの台湾の社会には敬老の精神があると思われますか」という設問を使った。台湾はには敬老の精神が「ある」と答えていたものは 51.9% (203)、それに対して「ない」と答えたものは 47.3% (185)であった。この認知においては性別の差はあまりみられなかった。つまり、5 割強の学生がいまの台湾の社会には敬老精神が「ある」とみているのである。また、いまの台湾においては「敬老」という意識が、まだ美徳として存在していると思うかについて、「どちらかといえば存在していると思う」51.4% (201)、「どちらかといえば存在していないと思う」42.7% (167)、「存在していると思う」4.9% (19)、をそれぞれ占めている。つまり、56%の学生がいま台湾には敬老という美徳が存在していると見ているのである。

台湾の大学生における敬老精神の存在を認める比率や認めない比率は約半々占めているということをどう読み解くかは、日本と中国で同じの調査の結果と対照してみると、中国の学生の 8 割強がいまの中国社会において敬老の精神の存在を認めているのに対して、日本の学生は僅かに 3 割未満である。これからすると、社会の工業化が進むほど敬老精神の失われる傾向があると説明できるであろう（小谷ほか, 2005: 54）。

4.3 老いの排除に関する認知

このように、敬老精神の存在を認めるものが 5 割強であるが、老人への排除に対する認識はどうであろうか。調査では、「いまの社会には人間の老いを排除するような仕組みがあると思いますか」という設問を使って、大学生が抱いている老人排除に関する認知を調べてみた。全体では、老人を排除する仕組みが「ある」と回答したのは 83.9% (319)、逆に「ない」と回答したのが 16.1% (61)と、8 割以上の学生が「老いを排除する仕組み」の存在を「ある」と答えていた。大

学生の半数以上が敬老精神が「ある」とみているが、老人排除システムの存在を認めるものは8割以上であるということは、敬老精神という伝統的価値がある程度残っているが、人々の意識を配慮し入れる社会的体制は備えていないと読み取ることができるといえる。

また、前述したように、核家族が中軸である台湾では、多くの若者は祖父母との同居経験は少なくなっているはずであり、こうしたことは老いの排除の意識に反映しているのであろう。「老いの排除に関する認知」を「祖父母との生活経験」からみると、祖父母との生活経験をもっている学生は、社会には人間の老いを排除するような仕組みがあると思っている割合が88.7% (212)であり、祖父母との生活経験をもっていない学生の 77.5% (107)よりも多くなっている。その点では、祖父母との生活経験があるかどうかは、老いの排除に関する認知に有意な関係を示していると思われる。

4.4 棄老意識

前述したように、8割以上の学生が台湾社会には老いを排除する仕組みがあるとみていた。そして、棄老意識をみてみよう。そこで、次のような設問が用意された。「深沢七郎の『楢山節考』という小説は、かつての日本の民衆にみられた姥捨ての慣行を題材にしていますが、その物語では一家の主人である息子が母親を背負って山に登り、母親を置き去りにしてきる。このような慣行が貧しい民衆の中ではあったわけですが、あなたはこのことについてどう思うか」。そして、具体的には「子どもが親を捨てるということは人間として絶対すべきではない」(絶対すべきではない)、「やはりすべきではないと思う」(やはりすべきではない)、「当時としては仕方なかったと思う」(仕方なかった)、「子孫が生き残っていくためには当然だと思う」(当然だ)、「わからない」という回答肢を使って調べてみたとこ、「すべきではない」46.8% (182)、「絶対すべきではない」42.7% (166)、「仕方なかった」8.2% (32)、をそれぞれ占めている。棄老に対する否定的な意見が合わせて9割ほどという高い比率を示していることは、台湾の若者は自分の親を大切にしていると解してよいであろう。

この棄老意識を「高齢者とのつきあい」状況から見れば、**表3**に示したように、高齢者とのつきあいが相対的に「多い」場合、棄老「すべきではない」と思っていることが明らかである。

表３：「高齢者とのつきあい」別にみた「棄老意識」　　( )内は実数

棄老意識 / 高齢者とのつきあい	絶対すべきではない	やはりすべきではない	仕方なかった	当然だ	わからない
多い	38.0(19)	46.0(23)	10.0(5)	2.0(1)	4.0(2)
どちらかといえば多い	49.7(84)	42.0(71)	7.1(12)	0.6(1)	0.6(1)
どちらかといえば少ない	36.4(59)	53.7(87)	8.0(13)	0.6(1)	1.2(2)
少ない	50.0(3)	---	33.3(2)	---	16.7(1)
Total	42.7(166)	46.8(182)	8.2(32)	0.8(3)	1.5(6)

ところが、都市化が進んでいる現在では、都市に生まれ、都市型の生活経験だけをしている若者が多くなっている。こうしたことも棄老意識に関係しているのではないかと思われる。都市化の程度との関連をみたところ、**表４**に示したように、台北市では「仕方なかった」が 19.2%、「当然だ」が 1.0%、合わせて２割を占めている。次いで台北県 7.3%、その他の地域 3.6%となっている。そこからみれば、台北市の出身者が棄老に対する肯定的意見が多かった。言い換えれば、都市化の程度が高ければ、「棄老」を受け入れる割合が高くなっていると読み取ることができるであろう。ワース(Louis Wirth) が『生活様式としてのアーバニズム(Urbanism As a Way of life)』の中で論じたように、都市生活と農村生活との特徴を区分する場合、農村地域より、都市地域の方は個別差異への包容性が高いということであるが、そのことはここで証明されている。

表４：「出身地」別にみた「棄老意識」　　( )内は実数

棄老意識 / 出身地	絶対すべきではない	やはりすべきではない	仕方なかった	当然だ	わからない
台北市	27.3(27)	48.5(48)	19.2(19)	1.0(1)	4.0(4)
台北県	46.3(38)	45.1(37)	7.3(6)	---	1.2(1)
その他地域	48.4(93)	47.4(91)	2.6(5)	1.0(2)	0.5(1)
海外	54.5(6)	27.3(3)	18.2(2)	---	---
Total	42.7(166)	46.8(182)	8.2(32)	0.8(3)	1.5(6)

ここでみた棄老意識は昔の棄老行為に対する意見を聞くものであったが、以下ではいまの社会の中で大学生が実際に老人をどのように捉えているかを分析していきたい。

4.5 高齢者への差別意識

現代都市が老人を排斥する空間構造をもっていると良く指摘されているが、そうであれば、どのような心理的なメカニズムが働くのであろうか。こうした差別意識を捉えるために、次の文章題の設問を使った。「百貨店街のある都心を老人の団体が20～30人大挙して歩いていました。老人たちの中には腰の曲がった人もいる。着ている服も地味で、周りの美しい建物や最近の若者のファッションとは大部違っている」という文章に対して、「このような光景を想像し、この老人たちをどのように思うか」、そして、この文章題に対して、(1)「いやだな」と思う、(2)「きたならしい」と思う、(3)「場違い」であると思う、(4) 老人も結構「元気だな」と思う、(5)老人は都心のような便利な所で住むべきだと思う、(6)老人はできれば静かな所で生活すべきで、このようなごみごみした所はふさわしくないと思うか、という6つの設問が用意された。また、この設問に対して、「そう思う」、「どちらかといえば思う」、「どちらかといえば思わない」、「そうは思わない」という回答肢を使った。これらの 6 つの設問は、(1)から(3)はいずれもが老人を否定的に評価した項目で、感性的な評価となっているのに対して、(4)は肯定的評価である。そして(5)と(6)は老人への明示的な差別意識を表示していない設問である。

調査結果は、「いやだな」と思うかどうかについて、学生のうち「いやだ」という否定的な評価は8.2% (32)にとどまった。「きたならしい」と思うかどうかについて、同じく「きたならしい」という否定的評価をするものは僅か3.8% (15)であった。「場違い」であると思うかどうかについては、19.9% (78)が「場違い」と答えている。全体的にみれば、都市空間のなかで、老人への排斥的評価は見られていない。老人も結構「元気だな」と思うかどうかについて、全体の94.4%が「元気だな」と回答している。「便利な所で住むべき」と思うかどうかについて、「どちらかといえば思う」44% (172)、「そう思う」32.7% (128)、「どちらかといえば思わない」20.2% (79)、をそれぞれ占めている。「静かな所で生活すべき」と思うかどうかについて、「どちらかといえば思う」49.4% (193)、「どちらかといえば思わない」28.9% (113)、「そう思う」17.65 (69)、をそれぞれ占めている。「便利な所で住むべき」と「静かな所で生活すべき」といずれもが多いということは、社会的な老人期待感を反映しているのであろう。

4.6 大学生の「生きがい」と高齢者への差別意識

表5は、台湾の大学生の生きがいと高齢者への差別意識に関する相関係数を示したものである。

「生きがい」要因と高齢者への差別意識に関する項目の設問との間に1%～5%の有意の相関度が見られる。そこからみると、「生活満足度」及び「静かな所に住むべき」を除いて、全ての設問の項目が顕著な正の相関関係を示している。つまり、台湾の大学生の「生きがい」意識が高ければ、高齢者への差別意識も高くなるといえる。

表5：「生きがい」と高齢者への差別意識との相関　(Pearsonの相関係数)

高齢者像 / 生きがい	いやだな	きたならしい	場違いだ	元気だな	便利な所に住むべき	静かな所に住むべき
生きがい感	0.560**	0.561**	0.400**	0.561**	0.694**	-0.017
生活満足度	-0.026	-0.023	-0.024	-0.010	-0.005	0.005
孤独ではない	0.555**	0.555**	0.388**	0.557**	0.686**	-0.024
自己存在満足度	0.553**	0.553**	0.387**	0.554**	0.685**	-0.027
家族に誇り	0.560**	0.560**	0.385**	0.562**	0.690**	-0.022
自己能力発揮度	0.391**	0.394**	0.275**	0.391**	0.490**	-0.017
社会的不可欠性	0.553**	0.554**	0.391**	0.555**	0.690**	-0.021
社会的貢献能力	0.558**	0.559**	0.395**	0.560**	0.690**	-0.023

5. 扶養意識と老後生活意識分析

5.1 扶養意識

儒教文化の社会である台湾では、昔から敬老や親孝行の教育を重視してきているが、今日では大学生にはどの程度扶養意識といったものが存在しているのであろうか。「子どもが親の世話をすることについて、どのように考えているのか」という設問で扶養意識をみたところ、「親が年をとったら、子が親の世話をするのは当り前である」と回答したのが52.7% (206)、次いでは「余裕があれば、親の世話をするのがよい」41.7% (163)、「無理をしてまで子が親の世話をする必要はない」5.4% (21)、をそれぞれ占めている。つまり、9割強の大学生が親の世話をすることが必要であるとみているのである。また、「会社や組織（そこでの長も含む）への忠（忠誠）と親への孝（孝行）とが両立できない場合、あなた

はどちらを選ぶか」という設問に対して、「孝の方を選ぶ」が 73.9% (289)、「忠の方を選ぶ」が 24% (94)、をそれぞれ占めている。そこからみると、親を扶養することは、現代の台湾の大学生にとって責任だと考えており、扶養意識が薄くなっていないといえる。

5.2 同居意識

しかしながら、親の世話をすることについて扶養意識が強く残っているが、生活の実際的行動にそれが転化されるか、つまり、祖父母や老親とのつきあい及び親との同居意欲をどのように考えているのであろうか。まず、祖父母や老親とのつきあい状況から調べてみた。そこでは、「あなたは、祖父母や老親とのつきあいについて、どのようにお考えですか」という設問を使った。「時々会って食事や会話をするのがよい」と回答しているのが 59.6% (233)と最も多く、「たまに会話をする程度でよい」が 26.1% (102)を占めている。「いつも一緒に生活できるのがよい」と考えているのが僅か 12.3% (48)を占めている。そこからみると、台湾の大学生の中で、8割以上が「祖父母や老親」と同居しない方が良いと思っていることは明らかである。「親との同居意欲の低下」が多くの研究結果が指摘したが、ここでは同じの結果が出ている。

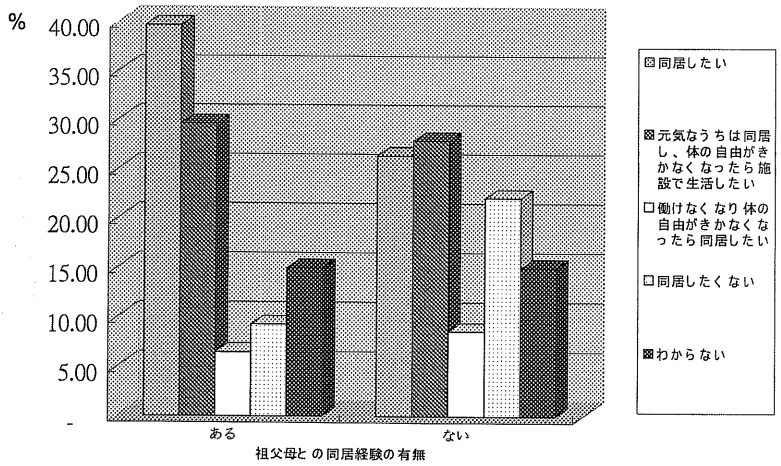
それにもかかわらず、老後生活に対して、「将来、老後生活をおくるとき、家族と同居したいですか」という設問の回答は、「同居したい」が 34.8% (136)、「元気なうちは同居し、体の自由がきかなくなったら施設で生活したい」が 28.9% (113)、「わからない」が 14.8% (58)、「同居したくない」が 13.8% (54)、「働けなくなり体の自由がきかなくなったら同居したい」が 7.4% (29)、をそれぞれ占めている。原因と状況を問わずに、老後期に家族と同居したいものが7割以上を示している。前述の「祖父母や老親とのつきあいについて」の意識と比較してみれば、大学生の8割以上が「祖父母や老親」と同居しない方が良いが、7割以上が老後期に家族と同居したいということは、大学生の内心的葛藤が語られているのであろう。

5.3 老後生活に関する意識

老後期に家族と同居する意欲に関係するものとして、「祖父母との生活経験」が考えられる。祖父母との生活経験については、「祖父母との同居経験の有無(一

年以上）」「ある」と回答するものが 64.3% (248)、「ない」と回答しているのが 35.8% (140)、をそれぞれ占めている。台湾の大学生の祖父母との同居経験がある者とそれがない者はほぼ３：２という比になっている。「祖父母との同居経験の有無（一年以上）」と「老後生活をおくるとき、家族と同居したいですか」とクロスさせてみると、**図４**に示したように、「祖父母との同居経験」のある場合、老後のときに家族と同居したい者が相対的に多い。

図４：「祖父母との同居経験」×「老後期に家族との同居志向」



また、老後生活の不安感について、「少しは感じている」と回答しているのが 53.2% (208)、「あまり感じていない」が 35.8% (140)、「大いに感じている」が 6.6% (26)を占めている。あわせて６割弱の大学生が老後生活の不安感をもっていることは意外に高い。

高齢者問題は、最終的には家族（家庭）と社会のどちらの問題だと思うかという設問について、「家族（家庭）と社会の双方の問題である」が 87.5% (342)、「社会の問題」が 6.4% (25)、「家族（家庭）の問題」が 2.8% (11)、の順になっている。

6. まとめ

以上、台湾の大学生の高齢者像を分析し、大学生の高齢者に対する好意度、

敬老意識、棄老意識、老人排除の認知などを分析した。その総合的考察として、以下のようにまとめていきたい。

まず、全体的な高齢者像に関しては、大学生が職業についての意味づけを強く持っているから、老年の開始期を「生理側面」（容貌、行動力と健康状況）及び「仕事能力の喪失」から捉える傾向が見られる。また、老後の仕事観に関する意識ついては、大学生は老後にふさわしい仕事に就きたいという意見が強い。しかし、自分たちの老後の仕事に対する継続意志は強くても、社会における高齢者の役割に対する意見は別のものである。大学生は高齢者の役割に対して、「文化伝達」及び「家族の精神的な支え」としての役割をもっとも多くあげている。それをみれば、台湾の大学生にとっては、高齢者が家族にとってまた重要な存在だと考えている。大学生の高齢者の役割に対しては、自分自身への期待と他者への期待とはかなり異なっているということは何を語っているかというと、若者の自己中心主義的な意識がそこで強く表していると思われる。

大学生は高齢社会へ高い関心をもっているが、しかしながら、高齢化社会に関心をもっても実際行動（ボランティア参加意志）とは完全に関連しているのではない。特に男子学生、理学部及び外国語学部の学生はボランティアに対して低い意欲を示している。「高齢者とのつき合い」の多い大学生が高齢社会への関心度が高く、逆に少ない大学生は関心度が低い。それをみれば、次代の高齢者を支える大きな役割を担っている若年層と高齢者とが交流する機会を増やす必要がある。

大学生の高齢者に対する好意度に関しては、全体的にいえば、８割強の大学生が高齢者に対して好意をもっている。そして、「高齢者とのつき合いの状況」が高齢者に対する好意度に影響をし、高齢者とのつきあいの多い大学生ほど老人好きのものが多くなっている。また、そうでない大学生より、高齢者に対する積極的な好意度でははっきりした差がみられる。

大学生の高齢者に対する敬老意識に関しては、敬老精神の存在を認める比率と認めない比率が約半々を占めている。しかも、高齢者との付き合いが多ければ多いほど、高齢者への尊敬意識が高い。核家族が主流な家族形態である台湾社会では、祖父母との同居経験は少なくなり、よその高齢者とのつき合いも少なくなっていくだろうと予測できるから、社会の工業化が進むほど敬老精神の失われないような対策の整備が緊急的課題であると思われる。また、敬老精神の存

在を認めるものが５割強であるが、老人排除システムの存在を認めるものは８割以上を占めている。そこからみれば、台湾では、若者層には敬老精神という伝統的価値がある程度残っているが、人々の意識を配慮し取り入れる社会的体制はまだ備えていないから、老人排除の社会的システムが形成されたのではないかと思われる。その改善策としては、今後高齢者福祉制度の整備が求められているのであろう。

台湾の大学生の棄老意識に関しては、棄老に対する否定的な意見が合わせて９割ほどという高い比率を示している。それをみれば、台湾の若者は自分の親を大切にしていると解することができる。また、棄老意識を「高齢者とのつきあい」状況から見れば、高齢者とのつきあいが相対的に「多い」場合、棄老「すべきではない」と思っている。また、都市化の程度が高ければ、「棄老」を受け入れる割合が高くなっている。今後とも産業化・都市化が一層進展していくと予測されるが、若者層の棄老意識が高まって行かないような対応策が整備される必要があるだろう。

大学生には親の世話をすることについて扶養意識が強く残っている。それは敬老や親孝行の教育を重視してきた成果だといえるだろう。しかしながら、扶養意識が薄くなっていなくても、かならずしも現実行動に反映するとはかぎらない。それは親との同居意欲が低いことから読み解くことができる。それにもかかわらず、老後期に家族と同居したい意欲が高い。また、「祖父母との同居経験」のある場合、老後のときに家族と同居したい者が相対的に多い。そこからみれば、社会孤立化は大学生の行動的面で現れているが、意識的面までには踏みこんでいない。大学生の内心的葛藤が語られているのであろう。

また、大学生の高齢者差別意識は、祖父母と一緒に生活した経験があるか、ないかということはそれほど顕著的な関係をしないが、祖父母や両親との同居生活志向や高齢者に対する愛着などと大いに関係していることがわかった。

要するに、台湾の大学生の高齢者像は全体的にポジティブな傾向を示している。そして、それは、高齢者との交流状況、すなわち、祖父母との生活経験に影響されている。それは我々には、若者の高齢者に対する愛着を保たせるために、将来の老化教育において、学生と高齢者との生活経験を増やすことが重要であり、またどのように図っていくのかという示唆を与えたのである。ただし、台湾の大学生の生きがい意識が高ければ、高齢者への差別意識も高くなるとい

う結果は、注意に値する。今台湾では近代化の波の中で、若者の個人主義化がこうした老人への差別意識を助長しながら定着しつつあるのかもしれない。そのために、如何に健全である大学生を育てつつ、同時にかれらの高齢者への差別意識を低減するかが、高齢社会に迎えるにあたって重要な課題であると思われる。

引用文献

(日本語)

辻正二, 2000,『高齢者ラベリングの社会学』恒星社厚生閣.

渋谷昌三, 1998,「Aging の社会心理学的考察」『山梨医大紀要』第 15 巻: 87－96.

小谷典子ほか, 2005,『東アジアの若者の高齢者意識 — 日本・中国・台湾の大学生比較調査から』(山口大学東アジア研究科 5 年プロジェクト研究報告書) 日本：山口大学東アジア研究科/東アジア都市コミュニティ・高齢化研究会.

(中国語)

http://www.ris.gov.tw/ch4/static/st20-3.xls (2005.07.15) (内政部戸政司公開資料)

http://www129.tpg.gov.tw/mbas/society/life-91/pdf-1/analysis1.pdf (2005.08.20)

http://www.moi.gov.tw/stat/index.asp (2005.08.20)

林如萍・蘇美鳳, 2004,「青少年的祖孫関係與其対老人態度之研究」『中華家政学刊』35 , 中華家政学会: 75-90.

洪淑媚, 1997,『大学生対老人態度之研究』台湾：国立台湾師範大学家政教育学系碩士論文.

陳宜汝, 2001,『大学生対老人態度及行為意向之研究 — 以某師範大学学生為例』台湾：国立台湾師範大学衛生教育研究所碩士論文.

蘇美鳳, 2002,『国中生対老人的態度及其対教学活動之啓示 — 以大台北地区国中生為例』台湾：国立師範大学人類発展与家庭研究所碩士論文.

劉惠津, 2001,『護理之家基本護理実習対職校護生的老年人態度及照護意願之影響』台湾：中山医学院医学研究所碩士論文.

陳瓊玉, 2003,『台北市某家商學生對老人之態度與行為意向研究』台湾：国立台湾師範大学衛生教育研究所碩士論文。

黄意萍・余清祥, 2002,「台湾地区生育率推估方法的研究」『人口学刊』第 25 期, 国立台湾大学人口与性別研究中心: 145-171.

張明政・李美慧, 2001,「台湾地区人口転型後之生育趨勢与発展」『人口学刊』第 23 期, 国立台湾大学人口与性別研究中心: 93-112.

薛承泰, 2003,「台湾地区人口特質与趨勢：対社会福利政策的幾個啓示」『国家政策季刊』2(4): 1-22.